

NEWS Letter

第76回日本食道学会学術集会の開催を終えて



第 76 回日本食道学会学術集会 会長

島田 英昭

(東邦大学大学院消化器外科学講座・
臨床腫瘍学講座)

令和 4 (2022) 年 9 月 24 日 (土) から 26 日 (月) にかけて第 76 回日本食道学会学術集会を新宿の京王プラザホテルで開催しました。2021 年に胃癌治療ガイドラインが改訂され、2022 年には食道癌診療ガイドラインが改訂されたことを受けて学術集会のテーマを「日本のガイドラインを世界へ!」としました。演題数 626 演題、参加登録者数 1275 名、現地参加 570 名でした。当初は、国際食道疾患会議との同時開催ということでしたので 9 月の週末開催という特別な会期を設定しました。コロナの影響で、海外から自由に入国できる状況ではなかったことから ISDE に関しては完全オンライン開催となりましたが、日本食道学会学術集会に関しては現地中心でのハイブリッド開催としました。

特例措置で 4 会場を使用して、28 セッションを企画しました。非外科系会員からのご要望通りに主として第 3 会場、第 4 会場は、終日非外科系会員が楽しめるようなプログラムとしました。当初の予定では、英語セッションはすべて ISDE で企画していましたので日本食道学会ではすべて日本語セッションとしました。講演者と司会者には極力現地参加をお願いしたこともありますが、運良くコロナ感染症第 7 波の影響も峠を越えており、期待以上に多くの会員が現地にお越しいただけたものと感謝しています。

初日の午後は、ガイドライン・取り扱い規約改訂に関する特別セッションを企画しました。今回の学術集会に合わせて改訂版が発売されましたので、会員の皆さんのが注目度は非常に高く、熱心な質疑が行われました。2 日目・3 日目に企画した各種のディベー



トセッション・シンポジウム・ワークショップは、現地での質疑中心で行われ、オンライン企画では得られない微妙なニュアンス・熱気が感じられて私自身も満喫できました。

会長講演では、千葉大学時代から 25 年以上続けてきた血液バイオマーカー研究を中心にご紹介しました。多くの研究は、千葉大学時代に着想したものであり、同級生として研究を支援してくれた松原・岡住両教授に感謝いたします。2009 年に東邦大学へ赴任して以来、食道癌手術症例は 350 例を超えており、南東京・城南地区 200 万人ほどの地域の皆さんのが期待に応えられているものと自負しております。非手術症例も含めて 500 例以上の治療前後の血液検体を 1000 検体以上保管しており、これらのサンプルを用いた自己抗体マークの開発など実臨床への応用についてご紹介しました。「食道癌病態を血液検査で数値化する」という考え方で研究を進めてきましたので、学術集会・会長講演を通じて、私の研究理念をご紹介できたことは研究者冥利につきると感じております。診療・研究面では、谷島聰、大嶋陽幸、鈴木隆、名波竜規を中心とする東邦大学上部消化管グループのメンバーの貢献に感謝します。

最後になりますが、学術集会への多大なるご支援をいただきました理事会・評議員会の先生方を始めてとする会員の皆様に深く感謝申し上げます。来年、安田卓司教授が主催される第 77 回学術集会でさらに熱いディスカッションができるることを楽しみにしております。本当にありがとうございました。

令和4年度 名誉会員推戴 ご挨拶

根本 建二

(山形大学理事・副学長)

この度、日本食道学会の名誉会員へ推戴いただきました。誠に名誉なことで、学会役員、会員の皆様に深く御礼申し上げます。私は 1982 年に東北大学を卒業後、すぐ放射線科医の道に入りました。宮城県立成人病センター（現宮城県立がんセンター）では故浅川洋先生に、東北大学では山田章吾先生に師事し、食道癌を中心とした放射線治療の道に進み、診療、研究に携わって参りました。この間、食道学会では診療ガイドラインや取扱い規約の作成に参画することができましたし、専門領域を超えて多くの尊敬できる先生方と知り合うことができました。眞の学際的集団であり、本当に素晴らしい学会だと思います。そんななか、放射線治療の進歩も他の分野同様急速ですし、食道癌に対する応用もまだまだ発展途上です。私も食道学の発展に寄与できるように、今後とも精進して参る所存です。最後に、日本食道学会の益々の発展を祈念いたしております。

令和4年度 特別会員推戴

天野 祐二 先生 笹井 啓資 先生 樋口 和秀 先生
福島 亮治 先生 真能 正幸 先生 三輪 洋人 先生
山上 裕機 先生

新役員編成

新 理 事：河内 洋 先生 小柳 和夫 先生
坪佐 恭宏 先生 峯 真司 先生

各種委員会・部会報告

役員変更に伴い、各種委員会の再編を行いました。

2022 年度 各種委員会委員長・副委員長一覧

(2022 年 12 月現在 敬称略)

	委員会名	役職	お名前
1	会則委員会	委員長	神宮 啓一
		副委員長	伊藤 芳紀
2	財務委員会	委員長	上野 正紀
		副委員長	佐伯 浩司
3	選挙管理委員会	委員長	石原 立
		副委員長	上野 正紀
4	会誌編集委員会	委員長	松原 久裕
		副委員長	島田 英昭

	委員会名	役職	お名前
5	広報委員会	委員長	加藤 健
		副委員長	坪佐 恭宏
6	国際委員会	委員長	島田 英昭
		副委員長	武藤 学
7	保険診療検討委員会	委員長	坪佐 恭宏
		副委員長	加藤 健
8	倫理委員会	委員長	根本 哲生
		副委員長	小柳 和夫
9	将来構想検討委員会	委員長	土岐祐一郎
		副委員長	河内 洋
10	全国登録委員会	委員長	渡邊 雅之
		副委員長	藤 也寸志
11	専門医制度委員会	委員長	大幸 宏幸
		副委員長	佐伯 浩司
12	食道科認定医認定部会	部会長	佐伯 浩司
		副部会長	河野 浩二
13	食道外科専門医認定部会	部会長	安田 卓司
		副部会長	大幸 宏幸
14	食道外科専門医認定施設認定部会	部会長	山崎 誠
		副部会長	亀井 尚
15	食道外科専門医カリキュラム設定部会	部会長	山崎 誠
		副部会長	河野 浩二
16	教育委員会	委員長	亀井 尚
		副委員長	山崎 誠
17	プログラム検討委員会	委員長	河野 浩二
		副委員長	峯 真司
18	食道癌取扱い規約委員会	委員長	峯 真司
		副委員長	武藤 学
19	病理組織検討委員会	委員長	河内 洋
		副委員長	根本 哲生
20	内視鏡検討委員会	委員長	武藤 学
		副委員長	石原 立
21	食道 ESD 偶発症検討部会	部会長	石原 立
22	拡大内視鏡による食道表在癌深達度診断基準検討部会	部会長	石原 立
23	拡大内視鏡による Barrett 食道癌診断基準検討部会	部会長	石原 立
24	アルコールと食道がんに関する啓発活動部会	部会長	武藤 学
25	食道癌診療ガイドライン検討委員会	委員長	北川 雄光
		副委員長	石原 立

	委員会名	役職	お名前
26	ガイドライン評価委員会	委員長	大幸 宏幸
		副委員長	神宮 啓一
27	用語委員会	委員長	伊藤 芳紀
		副委員長	河野 浩二
28	GERD 検討委員会	委員長	岩切 勝彦
		副委員長	栗林 志行
29	研究推進委員会	委員長	河野 浩二
		副委員長	掛地 吉弘
30	総務委員会	委員長	小柳 和夫
		副委員長	渡邊 雅之
31	医療安全委員会	委員長	佐伯 浩司
		副委員長	松原 久裕

[会則委員会]

定款施行細則変更について

委員長 神宮 啓一

(東北大学大学院医学系研究科 放射線腫瘍学)

2022年9月24日開催の当学会評議員会および社員総会において承認された定款施行細則変更につきまして、お知らせいたします。変更の内容は以下のとおりです。

1.年会費値上げについて

2.評議員選任について

(1)選挙評議員立候補資格の業績基準について

(2)非選挙評議員の選考方法について

詳細は会員マイページに「会員向けお知らせ」として掲載しておりますのでご確認ください。

https://www.esophagus.jp/private/mypage/news_20221102.html

変更後の定款および定款施行細則はこちらをご確認ください。

<https://www.esophagus.jp/private/about/rules.html>

[選挙管理委員会]

評議員選挙について

委員長 石原 立(大阪国際がんセンター 消化管内科)

来年は、日本食道学会評議員改選の年となり、選挙評議員と非選挙評議員が選定されます。選挙評議員の要件は、65歳未満、連続5年以上、本学会の正会員で会費を完納した者であり、最近5年間の食道疾患に関連した研究業績(論文発表あるいは学会発表)の点数総計が10点以上とされています(業績点数は論文の場合、著者は4点、共著者は2点とし、学会発表の場合、演者は2点、共同発表者は1点として算出します)。非選挙評議員については、本学会の正会員及び準会員の中から業績並びに専門性などの学会運営上の必要性を考慮して選考します。

選挙日程は以下の通りです。

[選挙評議員]

立候補受付:2022年12月12日(月)から2023年1月20日(金)

17時必着(郵送による受付)

立候補者公示:2023年2月3日(金)

評議員選挙:2023年2月7日(火)から2月28日(火)

17時必着(郵送による受付)

開票作業、当選確定:2023年3月6日(月)

[非選挙評議員]

選考委員会委員による選考:2023年2月3日(金)から2月28日(火)

選考委員会委員長による選出:選挙評議員選出日の

2023年3月6日(月)以降

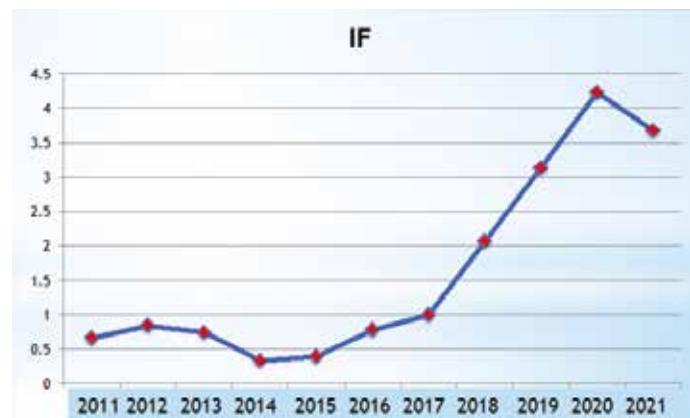
[会誌編集委員会]

会誌編集委員会報告

委員長 松原 久裕

(千葉大学大学院医学研究院 先端応用外科学)

すでに今年の食道学会総会にて土岐理事長からの発表にもあったように2021年の英文機関誌Esophagus誌のImpact Factorは3.671であり、3点は超えているものの2020年のImpact Factor 4.230より低下しました。たいへん残念ではありますが、昨年のImpact Factor計算法は通常の刊行に加え、online firstでの引用が加わり、例年よりかさ上げされております。今年からはonlineで発表された論文のみで計算されるため、より厳しい状況が予想されます、と昨年のこのnews letterにおいて報告し、より一層の引用を呼びかけさせて頂きました。皆様のご支援もあり、また本誌自体が実力につけてきたこともあり、この程度の低下でおさえることが出来ました。今年も食道分野でのトップの座は維持しております。また、グラフにしてみると2020年がやや突出しており、これを除けば順調に上昇していることが見て取れます。ただ、その伸びが低下していることも事実であり、より素晴らしい論文の投稿をお待ちしております。是非ともよろしくお願い致します。



論文投稿数も順調に伸びており、昨年は283編でしたが今年は8月末で233編とさらに躍進しております。前号でも書きましたが、中国からの投稿が増え続けており、8月末の時点では日本からが82編、中国からが84編とこれまで続けて来た投稿数トップの座を奪われそうな雲行きです。掲載論文数では全く問題無いのですが、繰り返しになりますが是非とも多くの論文の投稿をお願い申し上げます。

2021年の最優秀論文賞は坊岡英祐先生のWhole exome sequencing and deep sequencing of esophageal squamous cell carcinoma and adenocarcinoma in Japanese patients using the Japanese version of the Genome Atlas, JCGA. (Esophagus 18: 743–752, 2021)が選ばれました。昨年までは選考であり意見が分かれず選出されておりましたが、今年の選考では多くの論文に票が分散し、その中から見事に選ばされました。この事自体も本誌が成長し、素晴らしい論文が数多く掲載されるようになった証だと思います。また、投稿の増えた論文を数多く査読していただいた功績を賞するbest reviewer功労賞は例年2名でしたが、松田諭先生査読本数18編、佐伯浩司先生13編、坊岡英祐先生13編と3名の方が受賞されました。また、best reviewer準功労賞は吉田直矢先生、栗林志行先生、野間和広先生、片岡洋望先生の4名が受賞されました。以上の先生のみならず、ご多忙の中、Reviewを担当していただいた先生ならびに編集委員の皆様に心より御礼申し上げます。本誌の実力向上にたいへん貢献している重要な部分を担っていただいている、心より感謝申し上げます。

今後も皆様のご支援により、本誌が消化器分野のtop journalとなるよう、頑張っていきたいと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。

〔広報委員会〕 市民公開講座などについて

委員長 加藤 健

(国立がん研究センター中央病院 頭頸部・食道内科)

2022年は広報委員会にとって新しい試みが開始された年となりました。土岐理事長の命を受け、市民公開講座を企画し、2022年4月9日に、実行委員長に慶應義塾大学の浜本康夫先生を迎えて、第一回市民公開講座をWEB配信として行いました。患者会として情報発信を行っている食がんリングスの啓発活動と同時開催とし、午前を日本食道学会主催の市民公開講座とし、午後を患者会主催のE-rings2022という会を行いました。食道がんの最新情報を伝えする午前の部と、患者さんの日常的な疑問や困難にアプローチする午後の部と、相乗的な会となりました。また、新たな試みとして、動画をYouTube“食道ちゃんね

る”に随時アップロードし、アーカイブとして残しています。まだ再生回数は少ないですが、食道がんに対する正確な知識を発信する責任が日本食道学会にはあると思い、今後もコンテンツを増やしていく予定です。また、第二回市民公開講座は、がん以外にもフォーカスをあてるということで、日本医科大学の岩切勝彦先生を実行委員長に迎え、“胸やけ、つかえ感、ありませんか？～逆流性食道炎・アカラシアを知ろう”と題しWEB配信を行いました。逆流性食道炎やアカラシアの情報発信は、あまりなかったと思われる所以、患者さんにとっては大変有益な情報となったと思います。

2023年も第三回市民公開講座を4月23日に予定しております。こちらは関西医科大学の山崎誠先生を実行委員長に迎え、切除可能進行食道がんの治療選択肢について、外科、内科、放射線科、などの立場から意見を言うというものです。

また、ガイドラインの変更に伴い、HPに載せている市民向けのコンテンツを改訂するということも行っています。今後はYouTubeのコンテンツを充実させるために、積極的な企画を引き続き行なっていきたいと思っています。

〔国際委員会〕 国際委員会報告

委員長 北川 雄光(慶應義塾大学医学部 外科学)

2022年9月26日からの3日間を会期として、The 18th ISDE World Congress for Esophageal Diseases (President: Prof. Sheila K. Krishnadath)が開催されました。当初は第76回 日本食道学会学術集会(会長 島田英昭教授)と東京での合同開催を目指して準備を進めてきましたが、COVID-19の感染拡大のためISDE2022は完全Web開催となってしまいました。

一方、食道癌診療ガイドライン第5版が、本学術集会の会期に合わせて発刊となったこととあわせて、学術集会のテーマも「日本のガイドラインを世界へ！」とされ、ISDEにおいても日本のガイドラインに焦点をあてたセッションが多数企画されました。とくに、ISDE初日となった9月26日には、外科、内科、内視鏡の各領域において、JES/ISDE Joint sessionが行われ、最新の日本のガイドラインを題材に、アジア、欧米の演者から自国の指針との共通点、相違点について活発な議論が展開されました。JCOG1109の結果を踏まえた術前DCF療法に対しては、3剤併用に伴う毒性や併施される食道切除術の根治性の違いから、直接的な外挿は難しいという意見がある中で、根治切除可能な対象に対しては、化学放射線療法ではなく、強度を高めた化学療法を行うことに賛同する意見もあり、本試験が世界における集学的治療に変化を与える可能性も期待されました。来年は、

ISDE2023が、2023年9月8日から3日間、カナダのトロントにて開催されます。国際委員会としては、今後もISDEと連携を密にして、活動を継続して参りますので会員の皆様のご支援を賜りたくよろしくお願ひ致します。

【全国登録委員会】

全国登録委員会報告： 食道癌全国登録の現状とお願い

委員長 渡邊 雅之(がん研究会有明病院 消化器外科)

平素より食道癌全国登録にご協力いただき、誠に有難うございます。食道癌全国登録は2019年にNCDに完全移行し、本年は移行後4回目となる2016年症例の後ろ向き登録が終了しました。今回の登録では、385施設から9,749例のご登録をいただきました。これは前年より施設数で30、症例数で381例多いご登録となっております。ご参加いただきました皆様にこの場をお借りして、心より御礼を申し上げます。

2019年に食道癌全国登録がNCDに移行した当初、前向き登録と後ろ向き登録を同時に開始しておりましたが、NCD移行に伴う事務負担や管理経費の増大などの問題から、前向き登録を一時中断しておりました。この間、4年間の後ろ向き登録が順調に行われ、今後ともNCDを利用した食道癌全国登録が継続可能な見通しとなりましたので、来る2023年1月から前向き登録を再開することとなりました。今後6年間は前向き登録と後ろ向き登録が並行して行われることになります。参加施設の皆様方にはご負担をおかけすることになりますが、前向き登録に移行することにより、登録の悉皆性やデータの正確性が向上し、より精度の高い臓器がん登録になることが期待されます。ご理解とご協力の程、よろしくお願ひ申し上げます。なお、2023年前向き登録は食道癌取扱い規約第12版、UICC-TNM分類第8版に従って登録していただくことになります。また、2023年の後ろ向き登録は2017年症例となり、こちらは取扱い規約第11版、UICC-TNM第8版での登録となります。後ろ向き登録は2023年4月頃の登録開始で3か月程度の登録期間を予定しています。

日本消化器外科学会による2023年度『NCDデータを利用した消化器外科領域新規研究課題』の公募が例年通り予定されています。日本食道学会の公募締切りは2023年2月1日の予定です。大規模データベースを用いた食道領域の手術成績の解析が可能ですので、奮ってご応募の程、よろしくお願ひ申し上げます。

今後とも食道癌全国登録へのご参加・ご登録を何卒よろしくお願ひ申し上げます。

【食道外科専門医認定部会】

2022年食道外科専門医認定試験を終えて

部会長 安田 卓司
(近畿大学医学部 外科学教室上部消化管部門)

【食道外科専門医新規申請と認定試験の結果】

今年もcovid-19感染の第8波の兆しが認められる中、11月19日(土)国立がん研究センター中央病院の研究棟にて二次審査が無事終了しましたので結果を報告します。

今年の新規申請は26名で、書類審査は全員合格でした。手術ビデオ審査は内視鏡外科技術認定を食道領域で取得済の3名を除く23名が対象で、各2名の審査員で独立して審査が行われました。15名は両者の評価が一致し、10名が合格、5名が不合格と判定されました。残りの8名は第3者、第4者評価の結果、合格3名、不合格5名となり、最終的には13名が合格、10名が不合格という結果で手術ビデオのみの合格率は56.5%と少々厳しい結果となりました。本審査では郭清境界である解剖の露出・確認や出血時の冷静かつ適切な対応など安全性と確実性を重視するので、盲目的な操作は極力避けるように注意して頂きたいと思います。以上、上記合格者に加えて内視鏡外科技術認定取得者の3名と昨年の二次試験不合格で今年の一次試験免除の2名を加えた18名が二次審査に進みました。筆記試験(70点満点)は平均が49.7点(最高57点、最低42点)で全員6割以上の得点で、口頭試問(30点満点)も平均が23.7点(最高29点、最低18点)と例年より優秀な成績でした。総合成績は平均73.4点(最高85点、最低65点)ということで、今年は問題なく18名全員の先生を合格と最終判定しました。

【食道外科専門医更新申請】

2022年12月31日で専門医資格の有効期限が満了する40名と昨年更新ができず復活申請を行う23名の計63名が対象でしたが、更新申請をされたのは39名でした。内訳は期限満了による更新が37名で、復活申請が2名でした。書類審査の結果、診療経験点数不足の1名を除く38名の更新が認められました。

【食道外科名誉指導医】

申請は1名で承認されました。

【お願い事項】

- 領域別の術者、指導医を手術記録の中でもよいので必ず記載をお願いします。
- 郭清LN番号の記載をお願いします。
- 手術のイラストの記載もできればお願いします。食道胃接合部癌では特に必要です。

【今後の予定】

新規申請資格と更新申請の条件は現在見直しを検討中です。また、条件も緩和の方向で検討中です。学会H.P.上のお知らせ、または事務局からのメールに十分ご留意頂くようお願いします。

また、手術ビデオの審査基準については近々食道外科専門医制度規則施行細則に追記して公開予定ですので、これから取得を目指す先生は是非ともご確認いただければと思います。食道外科専門医は他の資格と比べてもハードルが高い、statusのある資格です。新規取得はやや難しくても、一旦取得したら更新が継続できる制度として専門医のいる施設を増加させ、より新規申請ができる機会が増えるように変えていきたいと思っています。ご協力の程よろしくお願ひいたします。

〔プログラム検討委員会〕

第76回日本食道学会プログラムアンケート報告

委員長 河野 浩二(福島県立医科大学 消化管外科学講座)

第76回日本食道学会学術集会は、2022年9月24日(土)～26日(月)、東京(京王プラザホテル)で、現地開催+Web配信というHybrid形式で開催されました。今回は、Web開催とはなりましたが国際食道疾患会議ISDE(9月26日～9月28日)との連結開催という稀な日程形式でした。例年のごとく、開催形式やプログラム構成に関するアンケートを、Googleフォームを用い、会員全員を対象とした形式で行いました。委員会を代表いたしまして、会員の皆様のご協力に感謝するとともに、その結果と概要を報告いたします(回答数299件、外科系79%、内科系14%)。

1. 第76回のHybrid開催(現地+Web開催)について

概ね満足86%、許容できる14%と、Hybrid開催に対する会員の満足度は極めて高かったです。特に現地がメインであったため、「久々に議論が盛り上がってワクワクした」という意見が複数あり、「現状ではベストな形式である」「配信で見直しができる」などのメリットがあげられておりました。一方「動画が見づらい」という意見も少数でしたがありました。

2. Covid-19が収束した場合、今後の食道学会の開催形式は?

Hybrid形式の希望が70%と多数を占め、コメントとして「遠方、勤務中からも参加できるし、議論は現地で活発に行える」「配信で復習できる」があげられていました。また、例年の現地開催のみの希望も28%あり、Hybridと合わせ、現地開催は必須という結論と思われます。

3. 完全Web配信となった教育セミナーについて

概ね満足81%、許容できる18%と満足度は高く、教育セミナーはWeb配信が定着した感があります。

4. Web配信となった場合(完全Webでも、Hybridでも)、配信形式で望ましいのは?

同日のリアルタイム配信と、1-2か月程度のOn demand配信の両立を望む声が、64%と多数を占めました。「On demandだと結局見ないのであるので、同日配信で臨場感を味わいたい」「すべ

てOn demand配信する必要はなく、コンテンツを選択してもいい」という意見がございました。

5. 「学会の英語化について」

英語セッションをプログラム全体の20%以下にすべきが68%、21-50%程度にすべきが27%と、英語化を一部のセッション(上級演題、国際セッションなど)にとどめるという意見が大多数と言えます。その理由に関しては、討論の質が落ちることへの危惧が多数あげられております。また、討論に関しては日本語としても、スライドやポスターの発表媒体は英語化を許容するという意見が65%程度ありました。完全英語化には賛成できないが、部分的な英語化への流れを容認するといった現状と思います。

6. 「評価の高かった特別セッション」

評価の高い企画を5件選択いただいたところ、ガイドラインを取り扱い規約のプレナリーの2件がダントツに評価が高く、次に、手術手技関連(ビデオシンポ1, 2、シンポ1)が、上位5企画として選択されました。

今回は、コロナ禍でのHybrid形式3回目の学術集会であり、会員全員を対象としたWeb回答形式のアンケート調査も3回目がありました。今後、これまでの3回のアンケート調査結果を分析し、学会の根本に関わる学術集会の開催形式、すなわち「現地開催のみ or Hybrid形式」の大命題に対して、本委員会および理事会などで議論を重ね、一定の方向性を導き出していきたいと思います。よく言われる「コロナ禍を経験して、New normalを確立する」いい機会だと思います。会員の皆様の忌憚のないご意見、ご提案をお待ちしております。

〔食道癌取扱い規約委員会〕

食道癌取扱い規約第12版発刊について

委員長 土岐 祐一郎
(大阪大学医学部 外科学講座消化器外科学)

2015年に「食道癌取扱い規約第11版」が発刊されてから7年が経過し、第12版を、2022年9月に第76回食道学会学術集会開催に合わせて発刊する運びとなりました。学術集会では、プレナリーセッション「ここが知りたい 食道癌取り扱い規約改訂のポイント」を企画して頂き、会長島田英昭教授には心より御礼申し上げます。

本版第12版では、術前治療の重要性が高まっていることを勘案し、術前診断に関する記載、特に治療方針に大きな影響があると考えられるT4診断およびリンパ節転移診断について、大幅に追加・修正するとともに、治療効果判定規準についても改訂を加えました。深達度診断として、cT3r(切除可能病変)とcT3br(切除可能境界病変)を新設しました。近年のPET-CT検査の普及に伴い、

リンパ節転移診断基準や治療効果判定基準にはPET-CTによる基準を参考所見として記載しました。将来的にはPETなど機能診断を取り入れた新たなモダリティーによる判定規準が提案され検討されることを期待しております。

前回の改訂からの継続検討事項として、UICCのTNM分類と可能な限り整合性が図られておりましたが、UICCのTNM分類第7版では日本食道学会の全国登録のデータが反映されていないこと、鎖骨上リンパ節の取り扱いが全く異なるため、N分類の整合性は見送られていました。全国登録のデータをもとにリンパ節転移状況と生存率から郭清効果が検討され、領域リンパ節の群分類が変更されていましたが、今回は、再発頻度も検討することで、より実臨床に即した領域リンパ節を策定しました。そのうえで、TNM分類との整合性を図るべく、転移個数による分類を採用しました。鎖骨上リンパ節に関しては、M分類に含めることで、TNM分類との整合性を図りましたが、M1aとすることで、他の遠隔転移とは区別し、一定の郭清効果があることを注釈として加えました。また、これらリンパ節転移のステージングの変更に伴い、食道癌全国登録の予後情報を用いて、術前治療が標準となった時代における新たなステージング分類を策定し、これまで共通であった臨床進行度分類と組織学的進行度分類を別々に設定しました。これら改訂作業において新たなデータの創出や解析が必要な事項については、若手のワーキンググループにご協力いただきました。

食道胃接合部癌の診断基準が決定し、7ページからなる小冊子が追加されていましたが、今回の改訂では、日本胃癌学会と合同で食道胃接合部癌の定義および記載項目を策定し、胃癌および食道癌全国登録を共通化することで、今後の実態調査を行えるように改訂しました。また、食道胃接合部癌の領域リンパ節を策定し、病期診断に関する記載を追記しました。

領域横断的がん取扱い規約との整合性を図るように改訂を加えました。本版第12版を今後の診療・研究にご活用頂く様、お願いいたします。

最後に、食道癌取り扱い規約委員会の委員長として、本版の作成にあたり歴代委員の先生方、食道癌規約委員会委員の先生方、取り扱い規約ワーキンググループの先生方、関連学会、ご尽力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

〔食道癌診療ガイドライン検討委員会〕 食道癌診療ガイドライン2022年版発刊について

委員長 北川 雄光（慶應義塾大学医学部 外科学）

2002年に「食道癌治療ガイドライン」が発刊されてから20年が経過し、第4版からは「食道癌診療ガイドライン」と名称を変更して、2022年9月に第76回日本食道学会学術集会開催に合わせ第5

版を発刊する運びとなりました。学術集会では「日本のガイドラインを世界へ！」とガイドラインをテーマに取り上げ、また初日にはガイドライン特集セッションを企画して頂き、会長 島田英昭教授には心より御礼申し上げます。

前版第4版改訂の際は臨床病期別の詳細な治療アルゴリズムを策定し、アルゴリズムの分岐点に関する重要なClinical Question (CQ)に対し、推奨文は行うまたは行わないことを強くまたは弱く(2方向×2段階)推奨するという大幅な変更を行いました。またガイドライン委員とは独立したシステムティックレビュー(SR)チームがMindsの診療ガイドライン作成方法に従ったSRレポートを作成し、ガイドライン草案に対して患者さんや16の協力学会からご意見を頂き第4版に反映させて頂きました。

本版第5版では前版の策定方針を踏襲しつつ、さらに患者さんの立場に立った客観性、透明性の高いガイドラインを目指しました。まず患者さんや前版から8学会を加えた24の協力学会にはCQ策定の段階から議論に加わって頂き、広く様々な角度からのガイドライン作成を心がけました。またガイドライン委員の中で外科医の占める割合を減らし(第4版:55%→第5版:46%)、様々な意見を反映出来るように配慮し、SRチームは公募とし62名の学会員にご協力頂きました。

さらに前版でのガイドライン推奨が実臨床においてどれほど影響を与えていたか調査致しました。2019年10月、2020年1月に重要なQuality Indicator (QI) 31項目を策定し、その実施状況調査をNational Clinical Database (NCD) 食道癌全国登録施設を対象に行いました。QI 実施状況が本版発刊後にどのように変化するかをしっかりと注視して参りたいと存じます。

最後に、日本食道学会ガイドライン検討委員会の委員長としてこれらを取りまとめられた杉町圭蔵先生、桑野博行先生はじめ歴代委員の先生方、本版の作成に携わった日本食道学会診療ガイドライン検討委員会委員、SRチーム、関連学会、患者さんでご協力を頂いた全ての皆様に心から感謝の意を表したいと存じます。



会告：第77回日本食道学会学術集会

第77回日本食道学会学術集会の概要について

いざ大阪へ！

診療科の垣根を越えて熱く語ろう！



近畿大学医学部
外科学教室上部消化管部門

会長 安田 卓司

この度、第77回日本食道学会学術集会を2023年6月29日(木)、30日(金)の両日、大阪国際会議場で開催させて頂くこととなりました。来年は日本食道疾患研究会から日本食道学会へと発展を遂げて丁度20周年にあたります。その記念すべき節目の学会を担当させて頂けることを大変光栄に思うと共に、次の20年の発展に向けた新たな出発点の会になればと期待する次第です。

今回のテーマは「Where there is a will, there is a way.～意思ある所に道ありき」とさせて頂きました。私の座右の銘ですが、食道癌治療も先達が強い意思と弛まぬ努力で新たな道を切り開いてきたからこそ今日の発展があると思います。しかし、まだまだ問題は山積みです。現状に甘んずることなく、より高みを目指して強い意志を持ち続けて頂きたいと、次世代を担う先生方へのメッセージを込めて設定しました。ちなみにポスターの図は私が映画好きということから「十戒」のワンシーンを基に作成して頂いたものです。

さて、主題演題ですが、悪性から良性に至るまで各診療科による複数の治療選択肢があるようなテーマを多く設定しました。特に近年は、食道癌における免疫チェックポイント阻害薬、食道アカラシアに対するPOEM、胃食道逆流症に対する内視鏡的治療など外科以外の治療選択肢が増え、以前よりも増して各診療科間での密な連携が必要となっています。是非とも外科系のみならず、外科以外の先生方から多くの演題登録と学会参加をして頂き、バランスの取れた会員構成の下で学術集会自体が治療方針決定のカンファレンスとなって熱い議論が交わされますことを期待しています。まだ未入会の先生には是非ともお声をかけて頂き、より多くの非外科の先生にご参加いただければと思います。

では、大阪で皆様のご参加をお待ちしています。



*編集後記

今年はコロナ禍から状況がかわり、いろんな研究会、学会への参加が緩和された年となりました。食道学会も2022年9月に総会を行いましたが、久々にリアルに学会出席できるとあって、にぎわっておりました。やはり実際に顔と顔を突き合わせて話すことが、ディスカッションには必要なだと痛感しました。島田先生のオーガナイズがよかつたことが原因だと思います。また、ガイドラインの更新、新薬の承認、規約の変更、標準治療の変化など、思い返すと、2022年は食道がん治療の転換期となった年と思われました。今後のグローバル化、さら成す新薬の登場など、時代のニーズに合わせて食道学会も変わっていくと感じました。

広報委員会

委員長	加藤 健
副委員長	坪佐恭宏
委 員	神宮啓一、山崎誠、竹内裕也、村上健太郎 有馬美和子、出江洋介、熊谷洋一、奈良智之 白川靖博、山辻知樹、浜本康夫、坂中克行 野村基雄、矢野友規、川田研郎、高木健二郎

特定非営利活動法人 日本食道学会 事務局

〒130-0012

東京都墨田区太平2-3-13 廣瀬ビルディング4階

電話 03-6456-1339 FAX 03-6658-4233

e-mail: office@esophagus.jp

ホームページ <http://www.esophagus.jp/>